

# SHOW HEYシネマルーム

★★★★

## ロード・トゥ・パーディション

2002 (平成14) 年10月17日鑑賞

Data

監督：サム・メン德斯

出演：トム・ハンクス/ポール・ニューマン/ジュード・ロウ

### 👁️👁️ みどころ

「全ての父と子に忘れられない物語がある」という歌い文句のギャング映画。舞台は1931年の大恐慌と禁酒法時代のアメリカ。トム・ハンクスとポール・ニューマンが実に渋い味を出している。それなりに説得力のある映画だが、「早くもアカデミー賞最有力候補」はちょっと言いすぎか・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <1931年のアメリカが舞台>

1931年のアメリカは、大恐慌と禁酒法の時代。日本でもその名を轟かせているイタリア系マフィアのアル・カポネが率いるシカゴのギャングが我がもの顔に振る舞っていた時代だ。アメリカにおける1929年10月の株価の大暴落は世界恐慌に発展した。その結果、日本もアメリカの影響を受けて昭和恐慌となり、しかも1931年には東北地方を中心に大凶作がおそった。

そんな中、大正デモクラシーと呼ばれた時代の中で定着しつつあった日本の政党政治は次第に弱まった。そして日本ではその後軍部が抬頭し、1930年のロンドン軍縮会議への不満もあって、軍人が発言力を強めていく時代が1930年代から急速に進んでいったのだ。

他方、ヨーロッパでは1918年の第一次世界大戦の終了後、過酷な戦後賠償に苦しむドイツではヒットラー率いるナチス党が抬頭し、1933年ついに政権の座についた。そして1931年にはポーランドへの電撃侵攻を開始し、第二次世界大戦が始まった。

しかしアメリカはこんな世界の激動に直接手を出さず、「名誉ある孤立」路線をとっていた。

アメリカから目を転じて1931年の中国をみればどうだったのか？1931年9月1

8日は柳条湖事件が発生した日だ。これは奉天（今の瀋陽）郊外の柳条湖付近で、関東軍が自ら鉄道を爆破した事件で、その結果、張作霖が爆殺され、満州事変が始まり、その後の日中戦争（15年戦争）の引き金となったものだ。

1931年は、こんな不安定な時代だった。

### <アメリカのギャング映画>

アメリカのギャング映画は数多いが、その代表は何といっても「ゴッドファーザー」。これはイタリア系のマフィアであるコレオーネの一家を描いたもので、マーロン・ブランドの重厚な演技とその息子（三男）アル・パチーノの魅力そしてその周りの芸達者な数多くの名優たちが登場する3時間20分の超大作。そして有名なあの美しいテーマソングはおなじみで忘れられない。過去の映画のベストテンを選べば必ず選ばれる名作中の名作だ。

また、面白いことに、この『ロード・トゥ・パーディション』とはほぼ同じ時期に『ギャング・オブ・ニューヨーク』も公開にされる。これはあの『タイタニック』のレオナルド・ディカプリオが主演するもので、当時人種のるつぼとなっていた1860年のニューヨークを舞台としたギャングの抗争を描いた作品。そして私が大いに期待している作品だ。

### <父と子の絆がテーマ>

この映画の新聞やテレビでの前評判はすごい。曰く、「今年ロード・トゥ・パーディションよりも優れた映画はあり得ないのは確かだ」、「勝利・・・トム・ハンクスは静かながら圧巻。ポール・ニューマンを見るのはスリリングだ。この映画を本年度のベスト映画のリストに加えよう」、「ゴッドファーザー以来の最も優れたアメリカの犯罪映画である」。

この映画の統一テーマは、「全ての父と子に、忘れられない物語がある」。そしてパンフレットの記載も「稀にみる強靱な愛の物語・・・・・・・・」となっている。

この映画の登場人物としては、まずイリノイ州ロックアイランドの町におけるアイルランド系のマフィアのボス、ジョン・ルーニーがポイントだ。ルーニーを演ずるのは名優中の名優ポール・ニューマン。今、何才になっているのか知らないが、とにかくカッコいい。

ルーニーには実の息子のコナー（ダニエル・クレイグ）がいる。しかしよくあるパターンで、一代目が立派すぎると、二代目はちょっとダメ。事あるごとに問題をおこし、周りからも信頼されていない。他方ルーニーには実の息子同様に可愛がっているマイケル・サリヴァン（トム・ハンクス）がいた。

サリヴァンはマフィアのボスであるルーニーに拾われて育ったが、今やその組織の大幹部となり、ルーニーからは息子同様に可愛がられていた。

このような場合によく起こるのがコナーとサリヴァンの確執。そしてそれによる父親ルーニーの苦悩だ。この映画のテーマの1つがここにある。

## ＜サリヴァンの生活の表とウラ＞

サリヴァンは妻と長男マイケル、次男ピーターの4人家族。あの大恐慌時代のアメリカで、立派な家に住み、車を持ち、安定した生活を営んでいる。はたしてその収入源は・・・？

実はこれは「黒い金」であり、「殺しの代償」ともいえるものだった。サリヴァンはルーニーの忠実な部下としてヤミの部分を担当してきた。すなわち、アイルランド系移民を差別するものやこれに敵対するものに対する容赦なき「殺し」の実行部隊だ。その意味でサリヴァンはいわば「武闘派」の代表だが、その反面、性格は冷静沈着で頭もいい。従って日常生活においてはそんなギャングの恐さなど微塵も見せず、善良な市民、模範的な父親を装い静かな生活を送っていた。そんなサリヴァンの役を演ずるのはトム・ハンクス。今ピッタリのはまり役だ。

妻は当然こんな夫の実態を知っているが、家族の安定した生活の保持のため、あえてその秘密の部分に踏み込もうとはしない。しかし2人の男の子たちは……。次男ピーターは頭のいい素直な子。そしてまだ小さいから父親の生活への疑問や興味はもっていない。しかし長男マイケルは感じる年頃。従って、弟と比べてあまり「いい子」でない自分は、何となく父親から差別されているように感じている。そしてまた父親がどんな仕事をしているのかについて、大いなる関心をもっていた。

そんなマイケルは、ある日外出から帰った父親が着替えている時、偶然にも拳銃を取り出すのを見てしまった。そこでマイケルが次にとった行動は・・・？

マイケルは父親の車の後部シートの中に隠れて、父親と一緒に出かけたのだった。そしてそこで見たものは・・・？何と、本物のコロシの現場、マシンガンをぶっ放す父親の姿だった。

## ＜大人の争いの発生とその拡大＞

大人の争いの発端は、バカ息子のコナーがとった行動だ。しかもその現場をサリヴァンの息子マイケルに目撃されてしまった。その行動を実父のルーニーから叱責され、さらにサリヴァンに対して嫉妬したコナーは、某人物にサリヴァンの殺害を依頼。そして自らはヤバイ現場を目撃されたサリヴァンの息子を殺しに出かけ、サリヴァンの妻と次男ピーターを射殺した。もっともマイケルとピーターを間違えるというミスもあったが……。

ここからマフィアの内部抗争は拡大していく。妻子の復讐に燃えるサリヴァン。ルーニーは、コナーとサリヴァンのどちらを立てるべきかを苦悩する。結局ルーニーは実子コナーを選択。そしてサリヴァンに対しては、血で血を争う復讐をやめるよう求め、和解金を提示した。

サリヴァンが応援を求めたシカゴのイタリア系マフィアであるニティー（スタンリー・トゥッチ）もこの解決案を支持した。弁護士の私が客観的に評価しても、このルーニーの

解決案は結構合理的かつ理性的なもので、これしか途はないと思えるものだ。しかしサリヴァンは断固これを拒否。ニティーとの話し合いの席を立った。そして、亡き妻の姉が住む「パーディション」という町へ向かった。これに対して「殺し屋」マグワイア（ジュード・ロウ）をさし向けるニティー。ここに、血で血を洗うマフィアの抗争が一気に加速していくことになった。

### <ロード・トゥ・パーディションの中での父子の絆>

殺し屋から追われるサリヴァンとマイケルは、パーディションに向かっていた。この映画のタイトルである「ロード・トゥ・パーディション」だ。殺し屋から追われる2人は道中は、ホテルにも泊まれず、車の中で寝るだけ。

しかし2人は今や共通の目的に向かって進む同志となっていた。その道中で今まで遠い存在だった父親は、本当の姿を息子に見せた。そして息子も、「お父さんはボクが嫌いだったの・・・？」と素直に質問。少ない言葉だが、父子の絆は確実に深まっていった。

### <この映画の良さと物足りなさ>

映画の最初のシーンと最後のシーンはパーディションの町。お婆さんの家の前の湖に1人立つマイケルが、父親のことを「サリヴァンはいい男だったか、それとも悪い男だったか。」と語りかける。そしてその答えははっきりわからない。しかし、「ただ1つははっきりしていることは、サリヴァンは僕の父親だったということだ。」というセリフが決め手だ。

撃ち合いの場面はあるものの、映画は全体を通して静かに展開していく。長々としたしゃべりもない。淡々とストーリーが進んでいく感じ。しかしその中で登場人物たちの思いは観客に十分伝わってくる。それは、これだけ芸達者な役者をそろえたのだから当然かもしれない。

しかし何か少し物足りない。人物像はしっかりしているものの、ストーリー全体の厚みが弱い。そんな感じがしてならない。その点でちょっと不満がある。アカデミー賞にはちょっと遠い感じの出来・・・？従って私としてはもう1つのギャング映画『ギャング・オブ・ニューヨーク』に期待したい。

2002（平成14）年10月19日記